

ワークショップのご案内

一般社団法人日本箱庭療法学会第33回大会を国立京都国際会館および京都大学（京都市左京区）にて開催いたします。今大会は、12名の先生方にワークショップ講師をお引き受けいただくことができました。

ワークショップの形式は、講師に一任しています。コースによって、テーマに即した参加者からの事例提供を募集しています。詳細は各コース（A～L）の案内をご覧ください。

みなさまの積極的なご参加を心よりお待ちしております。

1. ワークショップ概要

日 時： 2019年11月16日（土）9:30～12:00（受付開始 9:00）
会 場： 国立京都国際会館（〒606-0001 京都市左京区宝ヶ池）
講 師： （50音順・敬称略）

A	伊藤 良子	（帝塚山学院大学大学院）
B	岩宮 恵子	（島根大学人間科学部）
C	岡田 康伸	（京都大学名誉教授）
D	河合 俊雄	（京都大学こころの未来研究センター）
E	川戸 圓	（川戸分析プラクシス）
F	桑原 知子	（京都大学大学院教育学研究科）
G	高石 恭子	（甲南大学）
H	田熊 友紀子	（代官山心理・分析オフィス）
I	田中 康裕	（京都大学大学院教育学研究科）
J	弘中 正美	（山王教育研究所）
K	前川 美行	（東洋英和女学院大学）
L	山中 康裕	（京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授）

受 講 費：

	A 〔 7月31日までに お申し込みの方 〕	B 〔 8月1日以降 お申し込みの方 〕
会 員	6,000 円	7,000 円
非会員	8,000 円	9,000 円

*当日参加は、定員に余裕のある場合に限り可能です。

受 講 資 格： 一般社団法人日本箱庭療法学会正会員。もしくは臨床心理士の有資格者、臨床心理学を学んでいる大学院生、臨床心理学およびその関連領域で実践的な仕事に従事されている方で、心理臨床事例に関する守秘義務を遵守できる方。

2. ワークショップ・コースのご案内

A 分かりにくい箱庭表現―「鏡像段階」の体験にかかわる作業―

講師: 伊藤 良子（帝塚山学院大学大学院）

内容: 本ワークショップでは、神経症圏の箱庭のように感情に訴える表現とは異なる、「分かりにくい箱庭表現」を取り上げてきた。それらは、非常にユニークな箱庭であったが、自閉スペクトラム症、心身症、統合失調症などにおける内的世界の表現の「深さ」（伊藤、1988、本学会誌 1-1）とその理解を助けるものであり、生物学的な次元へのアプローチを可能にするものと考えられた。今回は、発達的な偏りがあるとされた思春期女性の 10 年間の箱庭療法過程を報告いただくが、最初の過程は、ラカンのいう「鏡像段階」の作業がなされることから始まっている。就職に至る長い成長過程から学びたい。

事例提供者: 渋谷 恵子氏

B 臨床的な「場」を整えることから生まれるもの

講師: 岩宮 恵子（島根大学人間科学部）

内容: 面接室での個別的な臨床は、言うまでもなく、心理療法の根幹を成すものである。しかし、行動化が多発するクライアントの場合、クライアントが身を置く場所で本人と日々関わる他職種の人たちとも、理解の方向性についてかなり話し合う必要が出て来ることもある。このように心理療法の枠組のなかで内的な問題を扱うことだけでは解決が困難な問題を抱えるクライアントが増えてきているからこそ、「連携」とか「チーム」ということが強調されるようになってきているのだろう。今回のワークショップでは、講師自身が幼少期から母親面接で関わっている、高知能ではあるものの ADHD と ASD が重複している事例を、本人の治療者である発表者との、並行面接の様子とともに検討する。発達特性による本人と家族の苦難と、高知能ゆえの周囲からの理解の難しさをどうしのいでいくのか、そして事務的な「連携」ではなく、それを真に臨床的な「場」を整える取り組みとして捉えたとき、そこでどのような変容が起こりうるのかをフロアのみなさんとともに考えていきたい。

事例提供者: 斎藤 真喜子氏

C 箱庭療法の基礎

講師: 岡田 康伸（京都大学名誉教授）

内容: 事例をまじえながら、箱庭療法の基礎をテーマとする。箱庭療法は、治療者が箱庭を体験することが大切である。昨年はそれが実現できたが、今回は元にもどして、事例に基づきながらこの療法の基礎を論じたい。まず、筆者が箱庭療法の要点を話し、できれば、ひとつの事例を報告してもらって、それに沿いながら基礎の肉づけを計りたい。箱庭療法は、箱と砂と玩具の 3 点が特徴的であると考えている。箱の中に、砂の上に玩具を置くことで、そこに制作者の世界が展開されてくる。これを系列的にみることで制作者が癒しを得、成長していく過程と平行であると考えている。

事例提供者: 受講者の中から事例提供者を募集します。

D 夢による事例検討:視点の深まりとズレ

講師: 河合 俊雄（京都大学こころの未来研究センター）

内容: グループ・スーパーヴィジョンにおいて、主に夢だけをレポートした事例報告を自主的に行う人が時々あり、細々とした情報からよりも夢だけによって事例を検討した方が本質的なことに迫れる場合があることを経験してきた。逆に、それがあまり本質的でない場合もある。そこで

このワークショップでは、夢だけの報告によって事例検討を行い、そこでの議論とセラピストの実感がどのように重なったり、またそれを超えるものがあったりするのかを検討したい。事例提供（夢のある事例）を募集します。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

E 箱庭の『枠』について考える

講 師： 川戸 圓（川戸分析プラクシス）

内 容：箱庭療法で用いられる箱庭の内法（うちのり）は、57×72×7（cm）と決められています。これはローエンフェルト（Lowenfeld, M）によって考え出されたのですが、カルフ（Kalf, D）にも引き継がれています。そして『枠』に囲まれたこの長方形の空間に様々なイメージ世界が表現されることとなります。『枠』は、いわば、制限であり、限定です。この制限・限定が様々な心理的な意味、例えば城壁のように守る意味、脱出不可能な壁のように閉じ込める意味等々を、生み出すことについて考えてみるワークショップとします。私たちのイメージ世界は『枠』のないところで表現可能かどうかという根本的な問いから、箱庭療法において『枠』の中に収まらないイメージ世界、どのように理解するのかという基礎的な問いまで、イメージ世界と『枠』にまつわる様々な問題を、参加者の皆さんと、ぐるぐると巡りながら深めて行けたらと考えています。その手がかりとなる事例を募集します。『枠』の問題を孕んでいると考えられる事例なら、どんな事例でも結構ですので、シェアして下さい。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

F 箱庭療法における「意識」と「無意識」

講 師： 桑原 知子（京都大学大学院教育学研究科）

内 容：箱庭療法においてどのようなことが起こっているのか、何が治癒的に働くのか。そのことを考えるために、今回は、「意識」と「無意識」とのせめぎ合いという観点から、箱庭療法を考えてみたい。理論だけではなく、実際に箱庭を「体験」し、また実際の事例をもとに考えてみたい。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。（どんなところでなされた箱庭でもかまいません。）

G 青年期から若い成人期の発達障害と箱庭療法

講 師： 高石 恭子（甲南大学）

内 容：2016年4月に、いわゆる「障害者差別解消法」が施行されて以後、高等教育現場では、発達障害や精神障害を抱える学生を「いかに支援するか」という現実的な課題に関心が集まっています。社会的障壁の除去（環境調整）や社会的自立に向けた教育（職業訓練を含む）が重視され、心理臨床家はそのコーディネートの役割を求められることが少なくありません。一方で、心理臨床家は、個々の青年や若い成人期の人々の内界に寄り添い、いくばくかを共有し、さらにその人らしさを豊かに育てていく過程を支えようと模索し、葛藤することが増えています。本ワークショップでは、高等教育の現場における実践の中で、発達障害もしくはその特性をもつと考えられるクライアントに、箱庭療法（その他の表現技法も含む）を導入した事例を取り上げ、それが相談過程に果たした役割を考察するとともに、そのような方法を用いた支援の意義を、学内外の連携者に伝えることばの力をどう磨いていけるか、参加者のみなさんと一緒に研鑽してみたいと思います。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

H 箱庭療法の砂との対話

講 師: 田熊 友紀子 (代官山心理・分析オフィス)

内 容: 箱庭療法で決められた基本的設えは、内側を水色に塗られた「砂箱」と、そこに張られた「砂」だけである。あとはミニチュア玩具が用意されるが、どのようなミニチュア玩具を用意するかは決められていない。箱庭療法に向き合うクライアントは、まず四角い箱の砂と対面し、砂との対話から始まることになるだろう。砂を触るのか否か。この砂の上に何を置いて世界を作り出すのか。本ワークショップでは、砂とは？陸とは？大地とは？われわれがよって立つ足元の地のありようについて、その歴史や生命との関係や働きについて考えることで、心の変容に箱庭の砂がどのように関係しているかについて考えてみたい。さらには箱庭療法において、砂が陸地や大地ともまた異なる多様な使われ方をする場合もある。箱庭の砂とは何か？についても、その基本的な意味や扱われ方などとともに、改めて考える機会としたい。箱庭の砂の使われ方について一緒に検討してみたいという事例がありましたら、募集します。

事例提供者: 受講者の中から事例提供者を募集します。

I 今日の青年期における発達の違いと偏り—学生相談の事例を通して—

講 師: 田中 康裕 (京都大学大学院教育学研究科)

内 容: どのような発達が実際に「定型」と目されるかは、「内在された変容可能性」という意味での個体差や生育環境に加えて、それらを取り巻く「世界」が実際にどのようなものであるかという時代的・社会的・文化的な要因の影響を受けざるをえない。今日においては、第二次性徴発現の低年齢化に見られるように、身体発達は早期化している一方、精神発達については、「大学生の幼児化」といった議論に示されているように、遅れていたり未熟であったりする面が目されている。ただ、この遅れもそれほど単純なものではなく、「若者の老成化」が云々されるように、以前に言われてきた「若さ」や「青さ」は、現代の青年には見られない。このワークショップでは、このような「今日の青年期における発達の違いと偏り」に着目し、夢や語りなども含めた彼らの在り方の特徴やその背景にある要因について、大阪大学キャンパスライフ健康支援センターの竹中菜苗氏による学生相談の事例を通して考えてみたい。

事例提供者: 竹中 菜苗氏

J 怒り・アグレッションのテーマをめぐって

講 師: 弘中 正美 (山王教育研究所)

内 容: 怒り・アグレッションは、一般にネガティブな現象として捉えられがちですが、心理臨床の世界では必ずしもそうではありません。怒り・アグレッションのテーマは、自分を主張し自分を変革していくときに避けて通れない必然的なものとして理解できることが少なくありません。プレイセラピーでは、怒り・アグレッションのテーマが展開することと、子どもの自我成長が密に関係していることをよく体験します。そして、このテーマは子どもに限らない、より普遍的なものであること、すなわち大人の事例においても重要な意味を持っていると思われます。しかし、自分の中の怒り・アグレッションを扱うことは容易ではありません。それを扱うこと自体が苦しい作業となるのです。それゆえに、このテーマを抱えた人を援助するための心理面接を工夫する必要があります。その具体的な方法のひとつとして、箱庭療法があります。子どもがプレイセラピーのなかでテーマに取り組むように、大人は箱庭制作のなかでこのテーマに向かい合うことができます。本コースでは、大人の箱庭療法事例を通じて、怒り・アグレッションのテーマを取り扱うことの心理臨床的意義を検討したいと思います。

事例提供者: 岡島 陽子氏

K 「私」と「空間」の構造化 一夢・箱庭などのイメージ表現から一

講 師： 前川 美行（東洋英和女学院大学）

内 容： 私たちセラピストは、箱庭・夢・描画などのイメージ表現に立ち会い、変容に気づき、意義を考える人である。例を2つ挙げてみよう。変化のない箱庭を延々と作り続けていたある人が、ある時大きな木を置いた。その木はいつも左下に置かれていたが、ある時、木は右上に置かれた。木の周りに置かれた動物たちにも向きが生まれ、木はまるで世界の中心を表しているかのようだった。この木は何だろうと見るうちに、木を越えて移動する動きによって、バラバラだった世界に繋がりが生まれたことに気づいた。木は世界のランドマークであり、領域の境界標でもあったのだ。それは「私」の境界を作る作業とともに生まれた動きであった。また、断片的で分かりにくく、散在する空間の夢しか伝えられなかった人が、ある時の夢に曲がり角の向こうに亡くなった母を描き出した。空間はまとまり、中心には自分が立っていた。この2例では、「空間」と「私」感覚がともに構造化したといえよう。ここでは新たに1つの事例から、イメージ表現による心理療法の機序を、「向こう側」（中村・郡司, 2018）という概念を手掛かりに理解を深めたい。（中村恭子・郡司ペギオ幸夫 2018, TANKURI:創造性を撃つ, 水声社）

事例提供者： 上田 さつき氏

L 『少年期の心』事例の、箱庭作品系列の提示と解説―「赤ずきん庭子事例」

講 師： 山中 康裕（京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授）

内 容： 私は、『少年期の心』を書いた当時、箱庭作品は、一枚も示さず、すべて、言語情報に変換して、イメージを各自に描いてもらいつつ、読み進んでいく、という方法論をとった。それは、当時、まだ、10年しかたっておらず、また、守秘義務、という事よりも、イメージを連続させることで、より、箱庭の深さを体験してもらえると確信していたからであるが、出版以後、40年を経過した今は、作品そのものを提示しても無論いいわけだし、箱庭の治療力の凄さを、身をもって体験して貰えると思うからである。

事例提供者： 講師自身の事例を提供します。

3. ワークショップの受講申し込み

ワークショップの参加申込は、別紙「第1号通信」を参考に、以下の要領でお申し込みください。

1. WEB 申込の場合

別紙 第1号通信3頁の「4. 大会参加の申し込み」と同様に右記QRコードより

お申し込みいただけます。ご希望のワークショップを選択し、お申し込みください。

先着順での受付となりますため、定員になったワークショップから締め切らせていただきます。

郵送による申込の場合

同封の参加申込書に必要な事項を記入し、大会準備委員会へご郵送ください（第1号通信の12頁に大会準備委員会の宛名ラベルを印字しておりますので、ご郵送の際にご使用ください）。

2. 同封の払込取扱票の通信欄に必要な事項を記入し、必ず合計金額を記入の上、お申し込みから **2週間以内**に諸費用をお振り込みください。**お振り込みの際には、必ず参加者ご本人の名義でお手続きください。**参加申込と諸費用のお振り込みを当方で確認でき次第、参加手続きが完了となります。なお、振り込まれた諸費用は、事情の有無に関わらず返金いたしませんのでご注意ください。

ゆうちょ銀行

口座名：00920-0-310345

加入者名：一般社団法人日本箱庭療法学会年次大会



3. お弁当の予約販売を行いません。予約される場合は、「第1号通信」6頁をご参照の上、お申し込みください。16日(土)は1個1,650円、17日(日)は1個1,000円でいずれでもお茶付です。特に16日(土)は、会場内のレストランをご利用いただけますが、座席数が限られており、会場周辺の飲食店も限られておりますので、ご予約をお勧めいたします。お弁当は、ワークショップ終了後(12:00)にお渡しいたします。
4. 事前申込者には、10月初旬に発表論文集と名札を送付します。当日は名札を必ず持参し、直接会場へお越しください。受付は必要ありません。

4. ワークショップの事例発表申し込み

1. 希望するワークショップ・コースが事例を募集している場合にのみお申し込みいただけます。なお、事例発表は原則として会員に限ります。
2. **WEB 申込の場合**
「3. ワークショップの受講申し込み」と同様にお申し込みいただけます。「ワークショップ事例発表」のチェックボックスで「発表する」を選択いただき、発表予定題目、共同発表者を入力し、**2019年5月7日(火)**までにお申し込みください。
郵送による申込の場合
同封の参加申込書の「3.発表申込」に発表予定題目、共同発表者を記入し、**2019年5月7日(火)【必着】**までにお申し込みください。折り返し、準備委員会より連絡いたします。
3. 事例発表の申し込みが多数あった場合は、講師と相談のうえ選択しますので、ご了承ください。

5. 研修ポイントについて

ワークショップ、シンポジウムの両方に参加した方には、日本臨床心理士資格認定協会「臨床心理士教育・研修規定別項」第2条(3)「本協会が認める関連学会での諸活動への参加」の通り、ポイントが付与されます。詳細は、第1号通信5頁の「6.研修ポイントについて」をご参照ください。

一般社団法人日本箱庭療法学会第33回大会 ワークショップに関する問い合わせ・連絡先

■一般社団法人日本箱庭療法学会 第33回大会準備委員会

E-mail: congress@sandplay.jp

FAX: 06-6233-8529

住所: 〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6 (有)新元社内

*お問い合わせやご連絡はなるべくEメールにてお願いいたします。

*お電話でのお問い合わせには応じられませんので、ご了承ください。